

令和 7 年 2 月 3 日
総務常任委員会資料
総務・市民協働部市民協働推進課

中宇治地域市民協働推進拠点整備構想（案）の概要について

中宇治地域において、既存の枠組みに捉われることなく、公共施設の将来像のモデルとなる市民協働推進拠点を整備していくにあたり、令和 5 年度に策定した「基本ビジョン」を踏まえ、拠点の具体的なイメージや整備に向けての手法等の方向性を示すため、現在、中宇治地域市民協働推進拠点整備構想（案）を取りまとめており、別添のとおり、その概要を作成しましたのでご報告いたします。

中宇治地域市民協働推進拠点整備構想（案）の概要

1．策定の目的

令和５年度に策定した『基本ビジョン』を踏まえ、中宇治地域市民協働推進拠点の具体的なイメージや整備に向けての手法等の方向性を示すために策定する。

2．中宇治地域市民協働推進拠点のポイント

敷地中央のオープンスペースを多目的・多用途な空間が取り囲むことで、人と人とのつながりを感じられ、幅広い利用者同士の交流が生まれることを目指す。

令和６年度に行ったモデル事業やワークショップを通して、出会いと自由な憩いの場、子育て支援の場、多世代交流の場、趣味・遊び・学びの場の４つの「必要とする機能」を実現するため、中宇治地域市民協働推進拠点の一例として、空間やそこで展開されるプログラム、設備について想定されるものを以下のとおりまとめている。

空間	プログラム例	想定される設備
多目的ホール	交流イベント、展示・展覧会、町内会などの地域イベント	ステージ・オーディオビジュアル・照明設備 １００名程度が着席できる広さ 分割対応できる可動パーティション
子育て支援スペース	キッズプレイスペース、自習スペース	昼は子育て支援、夜は自習など、昼夜の空間シェアを想定した設え
交流広場	屋外イベント、フリーマーケット、マルシェ、南北の通路	広場に面する他の空間の一時的な拡張空間としても機能する設え・様々なイベントに対応できるインフラ
子どもの遊び場	未就学児向けの遊び場、水遊び場	未就学児から小学校低学年生までが安心して時間を過ごせるように、保護者が過ごす空間との視覚的、物理的距離に配慮した設え
シェアキッチン	料理教室、子ども食堂、飲食を伴う交流事業、飲食業のスタートアップ支援事業	厨房 料理教室や客席を想定した飲食スペース 子育て支援機能との連携を想定した設え
図書コーナー フリースペース	図書の貸し出し、交換会の開催、シェア本棚、読み聞かせ、自習スペース、自由に集まれる場	本と気軽に接することができる設え 子育て支援機能との連携を想定した設え 地域住民が自由に集える設え
カフェレストラン	喫茶・軽食の提供、交流・憩いスペース	子育て支援機能や子ども遊び場との連携を想定した設え・街路からの視認性を考慮した設え
テラス	屋外飲食	広場に面した設え

ミーティングルーム	小規模な勉強会、講座、サークル活動、地域活動	多様なジャンルの活動を想定した設え
音楽スタジオ	レンタルスタジオ、音楽教室、楽器の練習、カラオケ	オーディオビジュアル・照明・防音設備
情報コーナー	地域住民向けの情報発信・交換 観光客向けの情報発信	様々な情報に触れられる設え
ベビーコーナー	おむつ替え、授乳、子どもの着替えスペース	子育て層がおむつ替えなどで滞留する時間が長くなったとしても気兼ねせず利用できるような空間的配慮のある設え

これらの空間・プログラムを通じて、市民参画・市民協働のまちづくりの拠点として、多くの人が集まり、地域のまちづくりや地域課題の対応に向けた話し合い、地域コミュニティの活性化などに向けて、連携・協働した活動が展開されることをイメージしている。

3. 事業手法

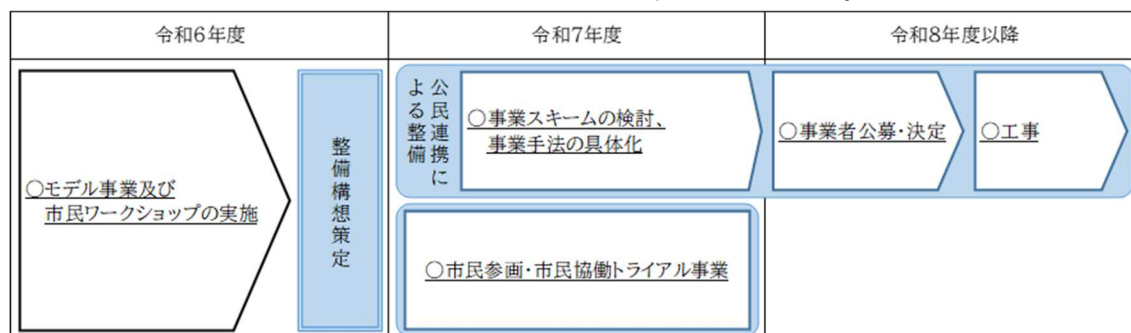
民間の創意工夫等により、様々な世代のニーズを把握して迅速に対応し、まちなかの交流と連携・協働をより良いものとする取組（付加価値につながるサービス）やコストも含めた効率的な管理運営も期待できることから、「公民連携」の事業展開を検討する。公民連携の手法には、様々な事例があり、提示した空間やプログラムの内容と中宇治地域の状況を踏まえ、最適な事業手法の選定に向けて、公民連携の検討を進める。

4. 拠点周辺の整備条件

市民協働推進拠点を整備するにあたっては、敷地南側の道路幅員が狭隘であることから、菟道ふれあいセンターの東側にあるあがた通りまでの道路を拡幅するため、土地を取得する必要がある。

5. 今後のスケジュール

拠点整備の想定している事業スケジュールは、次のとおり。



中宇治地域 市民協働推進拠点

中宇治の コミュニティ・リビング ワークショップ



2024 年 7 月 27 日 (土)
15:00 ~ 17:00
会場：ゆめりあうじ

vol.1 市民協働推進拠点に ふさわしい施設を考える

中宇治地域の新たなまちづくりの拠点整備を、市民協働によって進めるため、今回から全3回にわたってワークショップを行います。第1回目となる今回は、「市民協働推進拠点にふさわしい施設を考える」をテーマとし、UDCUの代表理事を務める森正美さんによる話題提供の後、5つのグループに分かれてグループワークを行いました。

「自分たちでつくる」

森さんの話題提供では、中宇治地域が抱える課題とその解決のためにこれまで行われてきた取り組みが紹介されました。大きな課題としてあげられたのは、

少子高齢化と地域のつながりの希薄化です。近年は自治会への加入率が大きく減少し、昔ながらの地域のお祭りも開催が困難だという声がたくさんあがっています。このような状況から、旧来の地域のつながりだけでなく、自宅や学校、職場の他にも「第三の場所＝サードプレイス」として、人々の交流拠点となり、一人ひとりが居心地のいい場所をつくっていく必要があるといえます。そのような拠点をつくる活動として、まち全体を“にわ”に見立て、そのつながりを考えながらまちの魅力を再発見し、人のつながりや活動のヒントを得るための「まちにわワークショップ」や、人々が集いつながる空

間づくりをサポートする「まちのリビング」などの事業が行われており、こういった活動が少しずつ地域に広がってきているとの紹介がありました。また、このような活動において大事なことは、行政だけに任せるのではなく、公民連携や市民協働によって、自分たちが望むものを自分たちでつくっていくという意識だとのお話があり、参加者の皆さんも今回のワークショップに取り組むにあたって、改めて当事者としての意識が高まったように思います。

「あってほしい空間・場所」

グループワークの前半では、昨年度策定した『中宇治地域市民協働推進拠点基本ビジョン』に示されている、「出会いと自由な憩いの場」「子育て支援の場」「多世代交流の場」「趣味・遊び・学びの場」の4つの機能ごとに、それぞれどんなことができる空間や場所があったらいいか、アイデアを出し合いました。今回は異なる多様な世代の参加者によってワークショップを行い、それぞれの立場から



	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	グループ5
出会いと 自由な憩いの場	芝生の広場 / 食事のできる場所				
	地域や観光の情報センター				
	・水遊びができる場所	・シェア菜園		・水遊びができる場所	・ドッグラン
子育て支援の場	自習スペース / フリースクール				
		・子ども食堂		・駄菓子屋	・託児スペース ・親の交流スペース
多世代交流の場	多目的スペース(ステージ・可動式の間仕切り)				
	・和室(茶道や華道) ・フリースペース	・サークル活動室		・教室が開ける場所	・教室が開ける場所 ・フリースペース
趣味・遊び・ 学びの場	図書コーナー		・リハビリや体力作り	図書コーナー	
	音楽スタジオ				・アスレチックジム
	・運動スペース	シェアキッチン			・ボール遊びスペース
その他		・駐車場 ・駐輪場	・レンタサイクル ステーション	・駐車場 ・駐輪場	

様々な意見があがりました。自分が利用するならこんな場所がいいといった、自身の環境や経験を踏まえたアイデアが多かったことが印象的でした。後半は前半で出たアイデアを、拠点として整備する予定の菟道ふれあいセンターの空間に具体的に落とし込むため、周辺の環境の特徴について確認したのち、その立地環境を活かして拠点施設としてふさわしいスペースやコーナーを考えました。

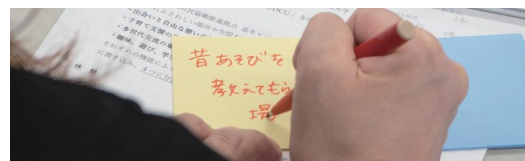
「場所に落とし込む」

菟道ふれあいセンターの周辺環境としては、入り組んでいて場所が分かりづらい、道が狭いといった立地のデメリットがあがった一方、周辺が住宅街であること、商店街に近いことなどから、買い物や学校帰りにふらっと立ち寄りやすいというメリットがあがりました。また、交通量が少なく民家も多いから子どもが遊ぶには安全という意見や、観光客は入ってきにくいという昨今の中宇治地域ならではの観点もありました。

具体的に拠点施設にふさわしいスペースとして全グループで共通していた

のは、大きな多目的スペースで、可動式の間仕切りなどを用いて人数や用途に合わせて使える空間にしたいという意見でした。また、中庭や芝生広場、水遊びができる場所など、開けた子どもたちの遊び場とともに多世代が交流できる場として屋外の空間アイデアも共通してあがっていました。他にも、小中学生の自習スペースというアイデアに関連して、若い世代からはフリー Wi-Fi が必要だという声もあり、設備や機能に関する意見も含め多岐にわたる議論が行われていました。また、観光客や初めての人には場所がわかりづらいという課題から、観光ツアーの起点にすることや地域の情報発信の場とするなど、地域の人だけでなく観光客も巻き込みながら利用できる場所になるといいという意見も出されました。全体として世代や属性を問わず、より気軽にふらっと訪れることができる場が求められているようでした。

ワークショップの最後には森さんから「当事者としての気持ちで望んでいて、どのグループも楽しそうに話していたのがよかった」との講評がありました。今



回は初めてのワークショップということもあり、最初のうちは緊張感もありましたが、徐々に打ち解け、お互いに話しながら新しい意見が生まれていく様子が見てとれました。また、世代を超えてそれぞれの考え方に触れるいい機会になったのではないのでしょうか。次回は「市民協働推進拠点に場所とかたちを与える」をテーマに、今回出たアイデアを実際に菟道ふれあいセンターの敷地にどのように配置していくのかを考えます。

次のワークショップ予定

9/15(日) 15:00 ~ 17:00

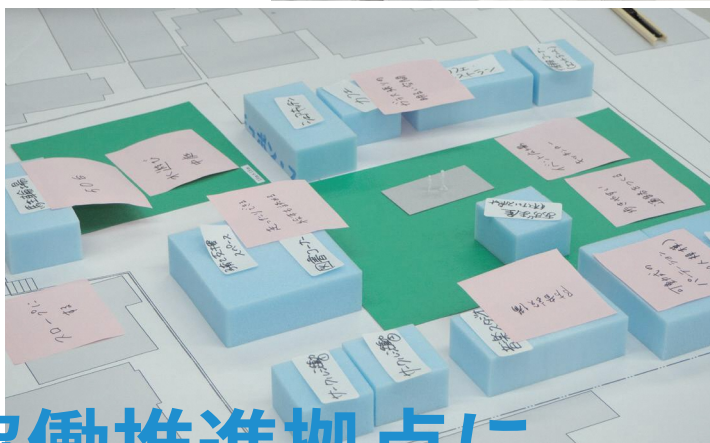
市民協働推進拠点に 場所とかたちを与える

中宇治のコミュニティ・リビング
ワークショップ
主催：宇治市
アーバンデザインセンター宇治
発行：2024年8月13日



中宇治地域 市民協働推進拠点

中宇治の コミュニティ・リビング ワークショップ



2024年9月15日（日）
15:00～17:00
会場：ゆめりあうじ

vol.2 市民協働推進拠点に 場所とかたちを与える

中宇治地域の新たなまちづくりの拠点整備を、市民協働によって進めるためのワークショップの第2回目を行いました。今回のテーマは、「市民協働推進拠点に場所とかたちを与える」です。公民連携で交流の拠点づくりに携わってきた株式会社コーミンの代表取締役である入江智子さんによる話題提供の後、グループワークを行いました。

〔交流空間のつくり方〕

入江さんからは、大阪府大東市で行っている公民連携による市営住宅の建て替え事業である、morineki プロジェクトについて紹介していただきました。この

プロジェクトは、地域の自立を目指すものであり、行政が一方向的にこういうものが欲しいだろうという想像で作るのではなく、実際に市民ワークショップを通して、本当にその地域の人たちが必要としているもの、使うものを作るということを重視したそうです。

また、具体的な空間づくりについては、市営住宅の住民に外に出て生活の質を上げて欲しいという想いから、境目のない空間を目指したそうです。morineki エリアは、建物の中と外の活動がつながり、交流が生まれ、街に広がってゆくような空間になっています。これは地域全体の価値を高めることにもつながってお

り、建物だけではなく周辺の環境も含めた居心地の良さに目を向けることが大切だということを学びました。また、広場や緑を含めたエリア全体の見え方も大事だという話があり、今回のワークショップを進める上で重要なヒントとなったのではないのでしょうか。

入江さんの話題提供により、参加者の皆さんも交流拠点の具体的なイメージが湧き、ワークショップでの活発な議論につながったようです。

〔大きさを考える〕

グループワークでは初めに、前回のワークショップで挙げられた施設やコーナーのプログラムを確認し、それぞれの広さや大きさを、広場を表す画用紙と建物を表す模型ブロックに当てはめて検討しました。実際の大きさをイメージするのが難しいという声もありましたが、このくらいの人数で使いたい、可変的な空間として、一つのブロックに複数のプログラムを組み合わせたらどうかといった意見が出され、徐々に理想のサイズが決





◀ 各グループで新しい拠点の機能やゾーニングなどを模型にまとめた

まっていきました。その後、菟道ふれあいセンターの平面図を用いて、広場と建物の配置を検討し、その空間でどのような活動が生まれるかについて、アイデアを出し合いました。

[空間の重なり]

空間の配置には各グループの特色が表れ、具体的な使い方や建物のイメージまで幅広く議論されていました。その中でも、全グループに共通していたのは、南側の道路に面した部分をエントランスとし、そこに隣接して大きな広場を配置するという点です。また、駐車場や駐輪場を入り口近くに設けるといった意見も多く見られました。その一方で安全性の観点から、子どもたちには裏の路地を利用して欲しいと、動線を工夫するグループもありました。

各グループを特徴付けていたのは広場の存在です。広場を一つにまとめたグループもあれば、用途に応じて二つ、三つに分けたグループもあり、広場の配置だけでなく、使い方についても多様な意見が出されました。例えば、小さな子ども

も向けのプールや、ボール遊びができるスペース、高齢者向けの健康遊具など、どんな人が利用するのかを考えながら議論が進められていました。広場に対して建物をどのように建てるかという議論にも発展し、広く見渡せるようにガラス張りの建物にしたいといった意見があがりました。

実際に配置していく中で空間の重なりが生まれたり、建物の裏にできたスペースを使ってみようという声があがったり、次第に具体的な人々の活動がイメージされていくのが見て取れました。

ワークショップの最後には入江さんから「誰がどんなことをするかが具体的に考えられていて、とても良かった」という講評をいただきました。また、具体的な空間設計に関しては、駐車場の配置に触れ、裏から見ても表から見ても素敵なものになるように、建物の両面性を考えてみてほしいというアドバイスをいただきました。今回は模型を使ったワークショップだったこともあり、実際に形にしていくことでイメージも膨らみ、前回以上に議論が盛り上がっていました。次



回は「市民協働推進拠点の具体的なプランを想像する」をテーマに、これまで出たアイデアをもとに中宇治地域の市民協働推進拠点にふさわしいモデルプランへとブラッシュアップしていきます。



次のワークショップ予定

10/20(日) 15:00 ~ 17:00

市民協働推進拠点の
具体的なプランを想像する

中宇治のコミュニティ・リビング
ワークショップ

主催：宇治市
アーバンデザインセンター宇治

発行：2024年9月28日



中宇治地域 市民協働推進拠点

中宇治の コミュニティ・リビング ワークショップ



vol.3 市民協働推進拠点の 具体的なプランを想像する

中宇治地域の新たなまちづくりの拠点整備を、市民協働によって進めるためのワークショップの第3回目を行いました。最終回となる今回のテーマは、「市民協働推進拠点の具体的なプランを想像する」です。UDCUの宮城俊作さんによる話題提供の後、グループワークを行いました。

〔空間をイメージする〕

宮城さんから、前回のワークショップの成果をもとに作成されたモデルプランについての解説と、空間のイメージを共有するために参考となる日本全国の交流空間の事例を紹介していただきまし

た。モデルプランはA、B、Cの三案に分かれ、広場やホール、カフェの配置がそれぞれ異なります。例えば、カフェの配置については、広場に面して日当たりの良い敷地北側に配置する案と、あがた通りからの視認性が高い敷地南東に配置する案に分かれています。このような配置の違いにより、人の動線や視線の抜け方、建物と広場のつながり方が変わるという説明がありました。

参考事例の紹介では、芝生広場や子どもの遊び場、シェアキッチンなど、グループワークでこれまでに出了アイデアに基づき、どれも小さなスペースながら、多様な使い方ができる空間を紹介していた

2024年10月20日（日）
15:00～17:00
会場：ゆめりあうじ

だきました。

宮城さんの話題提供を受けて、参加者の方からは広場と建物のつながり、そして敷地の中と外のつながりといった二つの内と外の関係性が大事になってくるといったコメントがあり、グループワークにおける重要な視点が提供されました。

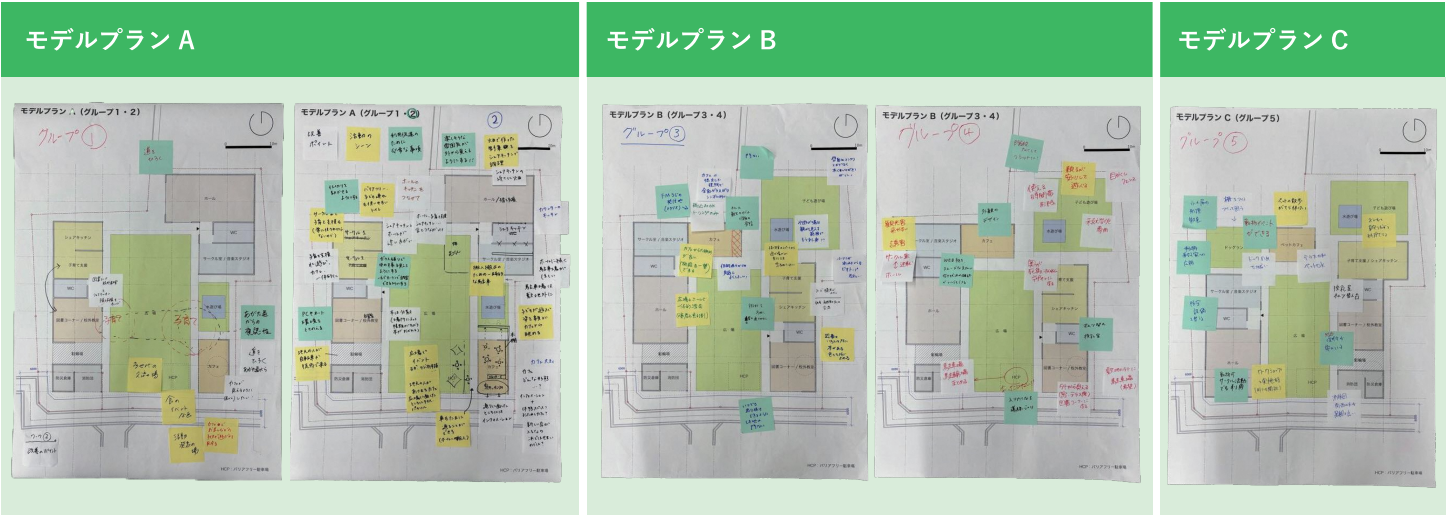
モデルプランができたことで、参加者の皆さんも空間が形になっていく実感を持ち、グループワークでより具体的な議論が進むきっかけとなったようです。

〔モデルプランの検討〕

グループワークでは初めに、第2回ワークショップの成果とそれらを反映した自らのグループのモデルプランを比較したのち、他のグループのモデルプランの参考にできる点と課題になる点を挙げていきました。他のモデルプランを見ながら、これは自分たちのプランにも当てはまりそうだといった声があがり、積極的に取り入れていく様子が見られました。比較をすることで、自分たちが大事にしたい点が明確になっていったよう



各グループ最終成果物



です。また、グループワークの後半では、それぞれで挙げたモデルプランの良い点と課題点を全体で共有し、それらのフィードバックを踏まえて、さらに自分たちのモデルプランを発展させていきました。議論の中で、より具体的な活動や使い方をイメージし、機能を重ね合わせながらプランの検討が進んでいきました。

「自分たちで作る」

敷地の内外のつながりを考えるにあたり、今回は動線に加え、視認性についても多くの議論が交わされました。例えば、あがた通りから建物が見えやすくなるように、敷地南側の前面道路を拡幅した方が良いという意見や、視線が敷地の奥まで抜けるように、また、人の動線を考え、敷地を拡張した方が良いという意見が出され、敷地が閉鎖的にならず、人々が気軽に訪れることができるデザインが意識されていました。敷地内でのつながりに関しても、広場と一体的に利用できる建物設計や、親が休憩しながら子どもたちの遊ぶ姿を見守れる配置などが検討されました。

また、提示されたモデルプランの機能にとどまらず、複数の用途に対応できる空間が求められていました。例えば、子育て支援に加えて高齢者も気軽に集える場所や、運動、ワークショップ、サークル活動に利用できるホールなど、様々な機能の重なりが重視されました。

さらに、活動のイメージを具体化するにあたって、観光客の視点も含めた検討が行われましたが、地域に住む人々が日常的に利用しやすい空間づくりを目指し、自分たちが使うならどうしたいかという地域住民としての視点を最優先に最終的な提案がなされました。

ワークショップの最後には宮城さんから「参加者の皆さんがどういう場所にしたいか真剣に考えたことで、自分たちの場所として使い続け、作り続けていくという思いを持つきっかけにできたのではないか」という講評があり、これからも自分たちで考え、関わり続けてほしいとおっしゃっていました。

全3回にわたって同じグループで取り組んだことで、回を重ねるごとにスムーズに議論が進み、開始直後から活発な意



見交換がなされていたことが印象的でした。ワークショップは今回で最後となりますが、これまでの成果を踏まえて中宇治地域の市民協働推進拠点の整備を具体的に事業化するための方法を模索していきます。

中宇治のコミュニティ・リビング
ワークショップ
主催：宇治市
アーバンデザインセンター宇治
発行：2024年11月16日

